アーシャ事務局便り

特定非営利活動法人
アーシャ
ASHA アジアの農民と歩む会
事務所・交流センター
〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢８３－１７
ＴＥＬ／ＦＡＸ ０２８７－４７－７８４０

あなたの想いを世界へ、あなたのご寄付でアーシャの活動を支えてください。

アーシャ臨時理事会

2023年12月15日(金)、臨時理事会を開催し、北海道、長野、岐阜、熊本、インドをオンラインで結び、理事８名、陪席１名が参加しました。三浦照男副代表理事より現地事業の概況が報告されました。JICA草の根事業は８月開始を目指したが共同事業団体の準備が整わず開始できていない。SCSADは寄付金とクラウドファンディングにより調達した資金で授業料を支援し、７名が研修に励んでいる。アラハバード有機農業組合では主力の日本米と味噌の販売が好調で、自立運営に向けた活動を進めている。縫製事業でも自立に向けてインド国内販売に力を入れている。アーシャ学校では私立学校の条件が厳しくなり、現在はマエダ校のみ。奨学金の提供や自立に向けた支援を行っている。

今年度、JICA草の根事業の変更により、他の事業費および管理費にも変更が生じている。そこで、補正予算案の作成を試行し、理事全員で検討した。今後も、事業費の大幅な変更は見込まれ、補正予算の作成方法を策定し、2024年度通常総会に報告することとしました。

また、来年度の活動方針について、意見交換を行いました。JICA草の根事業は、共同事業団体と連携して事業開始に尽力する。マキノスクールで行われている活動は、自助努力を促し、自立できるよう支援する。SCSAD事業は継続する。2024年度通常総会に向けて、活動予算を含めて検討を加速することとしました。

会員のご継続とご寄付のお願い

当会の活動は会員の皆様の会費とご寄付に支えられています。皆様よりご支援・ご協力をいただき、活動を継続しています。心より感謝申し上げます。2024年度の活動を発展･強化するため、引き続き、会員のご継続と会費のご納付をお願い申し上げます。ご寄付、募金もご協力ください。よろしくお願いいたします。
http://ashaasia.org/shien1/

ネットショップ「ASHA STORE」ではフェアトレード商品の販売に加えて、会費､ご寄付、募金の納付も扱っています｡ぜひご利用ください。
https://ashaasia.stores.jp/

事務局よりお知らせ

会費・寄付ありがとうございました。2023.11.16～2024.3.31　順不同、敬称略

誤字・記載漏れがございましたらご面倒でも事務局までご連絡ください。よろしくお願いいたします。

正会員	【山形県】志藤正一、三浦恒祺【栃木県】菊地創【愛知県】伊藤幸慶
賛助会員	【北海道】西野道宏、長谷川照美【青森県】郷家碧【山形県】長南正明【埼玉県】熊崎はるか
	【栃木県】梅田歩、丹羽寿美、福田鮎夢【東京都】北澤麻子、斎藤将志、Amarjargal Jargalmaa
	【神奈川県】柴田有【岐阜県】松本綾乃【大阪府】杉野美礼
終身個人賛助会員	【山形県】大内朋子【栃木県】齊藤瑠依
一般寄付	【山形県】志藤正一【栃木県】丹羽寿美【埼玉県】本部ひろゆき【神奈川県】柴田有、湯本浩之
	【静岡県】古橋克己【大阪府】杉野美礼【インド】アラハバード有機農業組合、マキノスクール
指定寄付	【山形県】荘内教会保育園【群馬県】島村めぐみ保育園
	【栃木県】川上聖子、菊地創、那須塩原教会、西那須野教会

■**会費**　個人正会員　5,000円　団体正会員　20,000円　終身個人正会員　50,000円　終身団体正会員　100,000円
個人賛助会員 3,000円　団体賛助会員 10,000円　終身個人賛助会員 30,000円　終身団体賛助会員　50,000円

■**郵便振替**　加入者名：アーシャ=アジアの農民と歩む会　口座番号：００１６０－０－３１５１４７

マキノスクールは、インド、ウッタル・プラデッシュ州プラヤグラージで活動するサム・ヒギンボトム農工科学大学にある学部で、本会が主に支援している団体です。実施している事業は、アーシャの会員の皆様からの会費・寄付ご支援、日本政府の無償資金協力や国内の助成財団からの助成金のほかに、インド三浦後援会、日本国外の様々な団体、個人の皆様からのご支援によって運営されています。プロジェクトを実施するにあたり、日本の皆様からの多大なご支援・ご協力に深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人 アーシャ＝アジアの農民と歩む会　☆この会報は日本で製作･印刷しています☆
＜事務局・交流センター＞〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢83-17　TEL：0287-47-7840　FAX：0287-47-7841
事務局　E-MAIL: info.jp@ashaasia.org　ホームページ: http://www.ashaasia.org

第７４号　２０２４年５月１日

特定非営利活動法人 アーシャ

ASHA アジアの農民と歩む会

会報 **74号**

3月15日、U.P.州とM.P.州の州境にあるケオティ滝へ。マキノスクールのスタッフ、学生、インターンシップ研修生、総勢35名でピクニックしました。美しい光景が広がる中で、チキンカレー、バーベキューを楽しみ、滝の周りを散歩、川での水浴び、のんびり景色を満喫しました。

巻頭言

休止から再開に向けての努力

インド事業統括責任者　三浦　照男

2019年末から脅威を現し始めた新型コロナ感染拡大、ピーク時にはBBCニュースによると「死者数一日３０万人、病院はパニック状態」との報道がなされ、人々の記憶に鮮明に残っています。私自身感染し、少量のお粥と水で１０日程寝込ました。２年半にも及ぶインド政府の厳しい行動規制方針によって、私たちのインド事業のいくつかを縮小或いは休止を余儀なくされました。

追い打ちをかけるように私たちのカウンターパートであるサムヒギンボトム農工科学大学に家宅捜査が入り、大学執行役員等１０名近くが起訴され、何人かは現在も拘束状態で裁判が長期にわたって行われています。その影響で、送金や助成金確保が困難となり、マキノスクール運営、協働で運営していたアラハバード有機農業組合の販売は３分の一ほどに減少し、規模縮小を余儀なくされました。

このような状況にありながら、2023年度、休止していた持続可能な農業農村開発コース（９か月）と日本人学生向けのインターンシッププログラムの再開にこぎつけました。これは日本やインドにおける私たちの支援者、協力者の賜物です。感謝いたします。

持続可能な農業農村開発コース（SCSAD）の再開

インド各地に散在する少数部族出身者から５名、ミャンマーの少数民族２名、そして日本の農業高校専攻科を卒業した青年１名が7月3日入学。極度の貧血症であったインドの学生１名を除いて、3月22日、7名が無事卒業できました。この青年農村リーダー研修のために、特別指定寄付をしてくださった方々、そしてクラウドファンドを通して寄付支援してくださった方々に心より感謝いたします。

特に、ミャンマーからは国軍に反旗を翻している少数民族の住む地域から男女２名がコースに入学してくれました。当初はパスポート取得が可能かどうか心配でしたが、渡印直前に準備が整いました。一児の母でもあるジーパンさんはカチン族、また生まれて数か月の男の子を残して入学したクンさんはパオ族で仏教徒です。ジーパンさんは小さな子どもを実家に預けてインドに来たのでした。研修期間「自分の村が国軍によって空爆されて、家族がバラバラになっている」朝の集会で目を赤くしながら彼女らがおかれている状況をシェアしてくれました。ミャンマーの内戦に関する報道が非常に少ないインドではなかなかイメージが湧いてきませんが、ウクライナやパレスチナガザ地区で起きている状況と似たような惨状が少数民族地域で起こっていることは想像できます。未来の農村のために何かをしたいという思いがその心配を跳ね除け、真摯に研修に励んでいました。座学、実習先での各先生たちの評価も高かったようです。私たちスタッフが彼らから力を得た思いでした。

その他の学生も、3月22日の卒業式後、順次それぞれの所属する国や地域に戻っていきました。北東インドからの卒業生２名、カトリック医療女子修道会の２名は夫々の送り出し団体に戻り、農村地域で仕事をするとのことです。日本人卒業生は、仲間と一緒に食べものを大切にする農村コミュニティーをつくりたいと抱負を語り帰国の途につきました。

インターンシッププログラムの再開

大学生のためのインターンシッププログラム（２週間）も再開できました。日本人５名（内１名はアーシャ理事）、モンゴル人１名、一般人２名（１週間のみ）、合計８名が参加しました。多様性際立つインドという環境で、マキノスクールのスタッフや学生と一緒にグループに分かれて立案し、協働で様々な活動ができました。マキノスクールの学生との各国料理交流会、バナラシ観光等も組み込んだため、濃密なスケジュールとなりましたが、参加者の多くは良い学びと体験ができたようです。「来年度も是非継続してください」という意見が最終日の評価会で多く寄せられました。

共に計画したことを作業や労働しながら、修正案や改善案を検討し、より明確な作業方法と実行可能な目標を見出していくことで学びを深めていくことは、SCSADもインターンシッププログラムも同じスタンスで行いました。マキノスクールの学生もインターンシップの参加者も違和感なく協働作業できたのも、机上の理論だけでは得られない貴重な学びとなったという達成感からきているのです。様々な宗教、文化、背景を持った者同士が得る、平和の道を探ることの難しさ、大切さを学ぶ体験学習となったようです。実りある研修を更に深め、育成された者たちの力になるように更なる努力が必要とされています。

写真でみるインターンシップ・プログラム活動

マキノスクールの教育及び事業理念、有機農業、食品加工、販売方法などについて学ぶ。有機農業組合農家を訪問

マキノスクールの学生とプログラム研修生が三つのグループに分かれて活動企画と実行
有機農業とキノコ栽培、食品加工商品開発、組合グリーンカフェのメニュー開発と店舗改善

インド、日本、モンゴル、ブータン等の料理を作って国際交流

マキノスクールのスタッフ、学生と一緒にピクニック。
バーベキューで昼食した後で、ケオティ滝の周りを散歩
（表紙写真参照）。

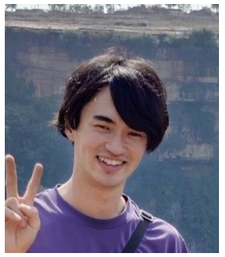
サンガム、バナラシを観光しながら、北インドの河川が食料生産のみならずの文化的、宗教的に重要な意味を持つことを学ぶ。
船でガンジス川の沐浴場を見学。

最終日
各グループの発表会、修了証書授与、その後評価会、今後のことについてプログラム参加者から意見を得た

若者の国際交流と農村を豊かにする支援

再開したインターンシッププログラム

アーシャ理事　**青野　勇**



筆者

私自身、７年前はSCSAD生としてインド・マキノスクールにいました。今回はスタディーツアー・インターンシップの付添人として久しぶりのインド訪問です。
スタディーツアーは約１週間、インターンシップは約２週間程度のプログラムで大学生を中心に計７名の方々が参加してくださいました。

インドの農村訪問から始まり、サンガム・バナラシ観光・農作業・グループ活動（有機農業・食品加工・グリーンカフェの改善）やピクニック、国際交流夕食会等、タイトなスケジュールの中、充実した時間を過ごせました。中には途中、体調を崩して休む人もいましたが、インドならではの経験としていい思い出として残してくれたら有難いと願っています。最後にはみんな元気に帰国ができて、何よりでした。

プログラム最終日マキノスクールの学生スタッフと共に

インターンシップ・スタディーツアーのメンバーはそれぞれ様々な場所から集まりました。インドやマキノスクールに何を求めてきたのか、おそらく学んだことは求めていたものとは少し違っていたかもしれません。しかし、メンバーの一人ひとりが前向きに活動を行い、たくさんの経験と学びを積むことができたのではないかと感じています。最後はみんな感謝の言葉が飛び交っていました。マキノスクールの可能性に期待できる発言でした。

プログラムの立案、実行について話す参加者と筆者（左から２番目）

グループ活動やインド人との交流を通して感じることは、日々、問題は色々な側面から出てきました。それは日本もインドも同じ、人がコミュニティを作って活動すると問題は必然的に出てくるようです。それをどうお互いに思いあって、解決していくかを再認識させられる時間であったように思います。一人だけ、自分だけ頑張っているのは苦痛で大変ですし、言語の違い、環境の違い、文化の違い、考え方の違いを乗り越えることは更に困難極まりないことです。それを乗り越えて、有意義な研修プログラムを作り上げた参加者全員に敬意を表します。そして、その違いをすり合わせて自分を表現して、ともに生き続けることを選択していく人に、自分はなりたい願っています。

最後に、このスタディーツアー・インターンシップを運営してくださった三浦さん・景子さん・サントッシュさん・マギーさんに心から感謝申し上げます。また、マキノスクールのスタッフ全員にエールを送ります。そしてインターン・スタデイーツアーに参加してくれた皆さん、ありがとうございました。また、来年も同様なプログラムを開催できることを願っています。

現地インターンスタッフ募集

- 提供できるもの：宿舎＆食費、インド国内交通費
- 渡航費、ビザ代、海外保険代は自己負担
- 職務内容：総務一般、有機農業組合及び裁縫事業のためのマーケティング関連業務
- 応募資格：2024年6月より9か月以上インドに滞在できる方、心身健康な方、海外で働く意欲のある方
- 問合わせ：teruomiura@ashaasia.org（担当三浦）

育成された農村女性は今

活躍する農村女性たち

インド事務局･組合調整員　**川口　景子**

アーシャが支援を続けているインド現地では、農村女性の参加を高めるために、これまで多様な機会を創出し、研修を行ってきました。その結果、現在様々な分野に研修を受けてきた農村女性が大活躍しています。今回はその女性達を皆さんにご紹介したいと思います。

組合の食品加工の技術を守り受け継ぐ農村女性達

アーシャを長年ご支援くださっている方達は、食品加工部門から始まった農村女性への技術指導を覚えていらっしゃると思います。まずは、2007年あたりから数年間に渡って食品加工専門家の高丸和彦氏（熊本県）や石原潔氏（岐阜県）から技術指導を受け、現在に至るまで味噌や醤油の加工から包装・発送までをずっと支えてきたスニタとアンジュ。二人とも穏やかな人柄で縁の下の力持ち、さらに新人を育ててきました。今や組合の味噌はインド全国で愛され年間2.5トン以上、醤油は1,000リットルほど販売できるようにまでになりました。スニタは今年３月で祝福されて定年退職を迎えましたが、毎日１時間半以上かかる道のりを通い、遅刻は殆どない誠実な姿勢は他のスタッフにも良い影響を与え続けていました。

モリンガと大豆加工を継続・指導する農村女性達

加工部門の中でも比較的新しいモリンガパウダーと豆腐加工のために新たな体制が形成され、2015年度にSCSAD10か月の研修コースに参加したルマは、縫製、母子保健事業のスタッフとして次々と経験を積んだ後、これら事業のリーダー役として活躍しています。彼女は独身で寮に住んでおり、卒業生として研修コースの学生のお世話、相談役としても頼られています。また、母子保健事業で農村保健ボランティアとして育成されたビムラ、アルティも加工作業を続けており、ビムラは真摯で懸命な姿勢を評価され、上記のスニタの後を継ぎました。同じく保健ボランティア出身のシタは、母子保健事業が完了したときに、モリンガを使ったお茶屋さんを開きたいと宣言していましたが、その希望を、ヘルシーでおいしい商品を広め、農村女性の自立を促進するために設置されたグリーン・カフェで実現し、カフェの運営、調理を担当し、日々食事やモリンガパウダーなどの加工品の販売に夕方遅くまで精を出しています。

プジャ（縫製）ルマ　シタ　アンジュ　スニタ　ラダ

アヌ

AVSS（アーシャ開発奉仕協会）縫製活動けん引役

縫製事業で現在スーパーバイザーを務めているアヌは、新しいことを学んで吸収し、じっくり考え、他の人と話し合いながら商品の作り方や課題解決をすることに辛抱強く向き合う農村女性です。また、同僚が間違っていてもなかなか言えない雰囲気のある農村の関係性の中にあって、勇気をもって伝えることができ、活動目標の達成に皆を導いてきました。実は、彼女も以前保健ボランティアとして活躍し、優秀な後輩を育成することに貢献してきました。現在は分野は異なりますが、持ち前の粘り強さで縫製員を育成し、他の農村女性の技術向上や協会の維持運営に貢献しています。注文が安定しないと縫製員の雇用継続は困難ですが、現在、約５～６名が経験や特技に応じて担当分野につき、ほぼ毎月仕事を得ることができています。

マキノスクールの運営を支える農村女性達

マーガレット

最後になりますが、現在の活動になくてはならない役割に没頭しているのがマーガレットです。昨年２月にマキノスクールの事務局長として就任しました。
彼女は、2003年度SCSAD10か月コースの卒業生で、ヒマラヤ山脈の山村出身、農業と自然が大好きな少数部族出身の女性です。明るい性格、正義感、責任感でリーダーシップを発揮し、慣れないオフィスワークにも果敢に挑戦して運営上大事な役割を担っています。また、そのアシスタントのラダも農村保健ボランティアとして育成された後、計算が強かったため現金出納係に抜擢され、それまで縁のなかったパソコンや英語にも挑戦し、財務管理や総務に貢献しています。

このように、現地では多くの農村女性が現地の活動運営の中心的存在となり、活動が継続・進展されています。家庭での役割も大きい農村女性達ですが、両立の背景には家族の理解と協力があり、農村女性が社会の一員として活躍する姿を示す良いモデルになっています。

農村開発と人材育成　SCSAD卒業業生の声

軍事政権と混乱の中にあっても
～持続可能な農業・農村開発研修コースのミャンマー女性卒業生の熱意～

川口　景子

ジー・パン

軍事政権下のミャンマーで、抑圧・暴力の対象にされてきた地方の少数部族出身のジー・パンは、小さな子どもを含む家族を残して、苦しんでいる僻地住民のために　役に立ちたいと希望をもって昨年６月にインドに渡り、今年３月22日に無事修了証書を受け取りました。

同国のメタ基金という地域の問題を住民主体で解決することをモットーにするNGOに所属し、2015年からコミュニティー・ファシリテーターとして有機農業や所得向上事業を担当していました。ここ数年は軍事政権による攻撃や災害が増え、緊急支援活動が多くなり、犠牲になった怪我人を病院に運んだり、難民キャンプへの食糧・飲料水の供給、心理ケア等に携わってきました。活動地は丘陵地帯で５部族が入り乱れて住んでおり、人々は農業を主に生業としていますが経済的に貧しく、若い人たちは海外に仕事を求めて移住するケースが少なくありません。仕事をしている中で、農業や農村開発についてもっと深く学びたいという想いが芽生え、団体と家族の理解も得られ、インドに渡りました。

研修途中、自宅近くが空爆されて気が気ではなかったはずですが、静かでいつも微笑みを絶やさず、全ての機会に熱心に取り組む姿は周りの学生にも影響を与えていたと思います。研修で一番学んだことは何かと問われると、「一番はここのスタッフの働き方。担当業務に真摯に取り組む姿勢や時間の使い方、あたたかい人間関係を築く姿勢」と組織内を観察していたことがうかがわれます。そして、キノコ栽培を含む有畜複合有機農業や９種類に及ぶ食品加工の技術は帰ったら役立つものばかりだと話していました。卒業前に早くも、所属団体とオンライン会議を行い、新たな任務として特産物生産委員会の委員になり、地域住民の生業を農業や食品加工技術、マーケティングを通して発展させ、地域組織を独立させるための活動に携わるとのこと。また、女性がより活動に参加できるようにリーダー研修を計画をしているそうです。「奨学金をご支援いただいたことで、自分たちの力だけでは不可能だった研修参加が可能になり大変感謝です。自分の地域をよくするために学んだことを実践していきたいと思います」と奨学金のお礼を述べました。

3月22日卒業式後の卒業生と教員スタッフ
ジー・パン（前列左から２番目）　筆者（後列右端）

日本でもインドでも人気上昇中★農村女性の手工芸品

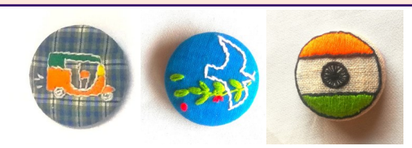
衣類の縫製が得意なカビタ

縫製の技術研修を受けた農村女性達が作り出す手工芸品が、日印両国で人気がでてきています。日本ではスカートやエスニック・パンツを中心とした衣類が徐々に増え、インドではコロナ以降止まっていたお土産市場が復活。どちらの国でもお店の声を取り入れ、商品開発を続けています。2023年度は売上が前年度比50%アップしました。

お問い合わせは avs@ashaasia.orgまでどうぞ。アーシャストアのウェブサイトでもご注文できます！

https://ashaasia.stores.jp/

木版プリントの
ロングスカート


新作刺繍バッチ
（左から）
オートリクャー
鳥と実
インド国旗

従来とは異なる新作
のボックスタイプ
のポーチ

新作ハンドバッグ

人気のエプロン
子ども用も
できました

2023年度・持続可能な農業・農村開発研修コース（SCSAD）卒業生の声

国・州名：インド・ビハール州
送り出し団体：メディカル・ミッション・シスターズ

名前：スマン・マシー
国際色豊かな同期やスタッフと共に過ごしたことは貴重な経験・勉強になりました。今後は農作業や食品加工の学びを活かしていきたいです。

名前：マリー・グラブ・ソイ
職員と学生の対等な関係性の中で過ごし、また家族のように過ごしたことが一番印象に残りました。体系化された有機農業の知識・技術を学べましたので、農民に伝えたいです。

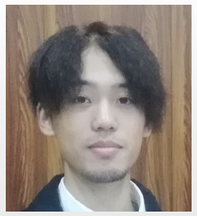
北東インド・マニプール州　送り出し団体：ロンメイ・ナガ・バプティスト協会（RNBA）

名前：チュンタイルン・ガンメイ
持続可能な農業を学べてよかったです。今後は様々なキノコの栽培に取り組み地域に貢献したいという思いが湧いています。

名前：カンガムリウ・ロンメイ
卒業後は送り出し団体の下、地域住民にキノコ栽培や持続可能な農業を伝えたいです。

国・州名：ミャンマー南シャン州
送り出し団体：メタ基金
名前：クン・カン・ゾウ・ヘイ
卒業後はここでの学びをコーディネーターとしてキノコ栽培含む有機農業や食品加工、マーケティングの分野で計画立案やリーダーシップ発揮に役立て、子どもの保護、緊急支援にも携わります。

国・県名：日本兵庫県　背景：三重県愛農高校卒業
名前：本田楽（がく）



一番印象に残ったのは農村を訪問したことです。日本とは全く異なる現実を学べだことが強く印象に残っています。エコ・スピリチュアリティの授業が好きでした。滞在中に学んだ言語を今後も継続して活用していきたいです。

国・州名：ミャンマー北シャン州　送り出し団体：メタ基金　名前：ジー・パン　（左4ページ記載）

インド活動現地・訪問者ご紹介（2024年1～4月）

年明け後、毎月様々な方がインドUP州プラヤグラージ県の現地を訪れてくださり、楽しい時を過ごしました。

１月17日 **マッカーリー・ジョナサンさん**（写真右）、 **里美さん**（左）
(ご夫婦で、栃木県那須塩原教会、アジア学院職員)
優花ちゃん（娘さん・真ん中）

１月27日　**齋藤瑠依さん**
（インド・プネ日本人会幹事）
プネに滞在する日本人駐在員の方たちの健康・食事情を改善されたくご訪問されました。
(写真左・合鴨農法日本米農家)

２月7～9日 **アシシュ・シャー医師、アシシュ・カードカ医師、スバシュ・パンデイ医師、**
（ネパール・キスト医学大学教育病院ボランティア）　モリンガ栽培・普及研修

３月２～16日　**スタディーツアー、インターンシップ**
参加者７名＋青野勇理事（P6-7参照）

４月　**尾之上みづきさん**（デリー日本人会ボランティアグループ所属・写真左）、**直己君**（息子さん）
農作業体験や農村訪問、食品加工の見学、市街地観光等。写真は早朝の有機農場でニンニク収穫の様子。